『予言集』などに見られるノストラダムスの年代観について

鈴木 大輔†

ノストラダムスは『予言集』や暦で，天地創造以来の年代について様々な算定を挙げていた。そのため，彼が年代について一貫した見解を打ち立てることはなかったと考えられている。しかし，それぞれの年代の発表された時期や媒体を考慮に入れると，『予言集』初版を刊行した時点での西暦紀元前5200年頃を創造紀元とする年代観と，1557年向けの暦以降で提示された紀元前4173～3967年頃を創世紀元とする年代観とに大別しうることが分かる。『予言集』第二序文には，紀元前4757年頃と前4173年頃とを紀元とする矛盾した年代観が併記されていることは，つとに指摘されている通りだが，第二序文の少なからぬ記述と合致するのは後者の年代であり，前者はノストラダムスの放棄された草稿などから別人が挿入したことが疑われる。本稿では，紀元前5200年頃から紀元前4173年頃への変更の理由を，ユダヤ系の出自を持つノストラダムスが，自身の社会的上昇のためにユダヤ色を薄めようとした結果ではないかという仮説を提起する。その仮説の当否はなおも検討の余地があるにしても，そのような仮説の検討は，現存する『予言集』を，あたかも最初から一貫した構想の下に成立したと考えるのではなく，時代状況との緊張関係の中で成立したものと考えることの必要性を浮かび上がらせる。

What kind of chronological views did Nostradamus adopt in his works?

Daisuke Suzuki

Nostradamus' *Prophecies* and his Almanacs listed a variety of chronological dates since the Creation, and it is believed that he never formulated a consistent view of the chronology. However, taking into account the time and media in which each chronology was published, it is possible to distinguish between a chronology that places the Creation around 5200 B.C. in the first edition of the *Prophecies*, and a chronology that places it around 4173-3967 B.C. in the Almanac for 1557 and later. It has been pointed out that the second Epistle of the *Prophecies* contains contradictory chronologies, placing the Creation around 4757 B.C. and 4173 B.C. It is the latter chronology that agrees with the various statements in the Epistle, and we suspect that the former was inserted by someone from an abandoned draft of Nostradamus or other source(s). This paper examines the hypothesis that the change from ca. 5200 B.C. to 4173 B.C. may be the result of his attempt to diminish his colors derived from his Jewish ancestors for his social advancement. Although the validity of such a hypothesis is still open to debate, such an examination highlights the need to consider the existing *Prophecies* not as if they had been established from the beginning with a coherent conception, but rather as if they had been established in tension with the historical situation.

1. はじめに

本稿の課題は，16世紀の人文主義者ミシェル・ド・ノートルダム（ノストラダムス）が，どのような年代観に基づいて作品を構成していたのかを検討することにある。ノストラダムスは主著『予言集』（*Les Prophéties de M. Michel Nostradamus*）を刊行したほか，毎年の暦（almanach）などを発表していたが，そこで示していた年代観には齟齬が見られる。この点，いくらかの先行研究がある一方，定説化した見解は確立されていない。

ノストラダムスの年代観は非常に錯綜しているため，確定的な見解を打ち出すことは難しい。本稿は，従来の見解を整理しつつ，どのような仮説を示しうるか，またそのような仮説の検討が，新たにどのような意義を持ちうるのかについて，見通しを得ることを企図するものである。

2. 年代観の整理

2.1 『予言集』初版における年代観（1）

ノストラダムスの『予言集』初版（1555年）には，息子

† 博士後期課程在籍中（人文学プログラム）

表１　支配する星・天使の周期とその開始年

支配する星と天使		第１期	第２期	第３期	西暦
土星	カシエル	0 年 0 か月	2480 年 4 か月	4960 年 8 か月	前 239 年
金星	アナエル	354 年 4 か月	2834 年 8 か月	5315 年 0 か月	116 年
木星	サキエル	708 年 8 か月	3189 年 0 か月	5669 年 4 か月	470 年
水星	ラファエル	1063 年 0 か月	3543 年 4 か月	6023 年 8 か月	824 年
火星	カマエル	1417 年 4 か月	3897 年 8 か月	6378 年 0 か月	1179 年
月	ガブリエル	1771 年 8 か月	4252 年 0 か月	6732 年 4 か月	1533 年
太陽	ミカエル	2126 年 0 か月	4606 年 4 か月	7086 年 8 か月	1887 年

セザール・ド・ノートルダムに宛てた序文（便宜上「第一序文」と呼ぶ）が収録されている。そこには，以下のような記述がある。

> そして現在，我々は永遠なる神の全き御力によって，月に支配されている。その全周期が完成する前に太陽が来るであろうし，その次には土星が来るであろう。[…] そして目に見える天の判断では，我々は全てを完成する第7千年紀にいるのだが，第8（千年紀）に近づいている。[…]（第43～46節[1]）

ここで彼は，第一序文を執筆した1555年が第7千年紀（6001～7000年）に含まれると明記しているが，これは当然，西暦ではない[2]。ノストラダムスのこの記述は，リシャール・ルーサの『諸時代の状態と変転の書』（1550年）の記述を下敷きにしたものである。ルーサはアブラハム・イブン・エズラ（Abraham ibn Ezra）の『理性の書』（*Liber rationum*, 12世紀）に基づく記述として，世界が354年4か月周期で7つの天体とそれを支配する点によって統御されていると説いている（Roussat 1550:88-92）[3]。その周期は，「教会史の父」とも言われる神学者，カイサリアのエウセビオス（265頃 - 339）が主張した天地創造の時である紀元前5200年を起点としている（上掲の表1を参照[4]）。

表１から明らかなように，『予言集』初版が刊行された1555年は，月の支配が始まって20年ほどが経っていた。詩百篇第1巻48番は，まさにその描写と考えられている。

> Vingt ans du regne de la lune passés
> Sept mil ans autre tiendra sa monarchie :
> Quand le soleil prendra ses iours lassés
> Lors accomplir & mine ma prophetie.
> 月の支配の二十年が過ぎた。
> 七千年をこえて，その君主制を保つだろう。
> 太陽が残された日々を受け取るであろう時に，
> 私の予言は成就し，終わる[5]。

この詩は月の時代（西暦1533～1887年）に入って20年を過ぎた頃に書かれており，その月の時代が西暦1887年（創世紀元7086年8か月：第8千年紀初頭）まで続き，太陽の時代に引き継がれることが描写されている。そして，その太陽の時代に入ると，彼の「予言は成就し，終わる」とされる。実際，354年4か月の周期を描写した詩は他にもあるが，詩百篇第1巻25番「月がその大いなる周期を完成する前に」，同56番「月がその天使に導かれると」，同62番「ラトニアの周期が完成する前に[6]」，第3巻97番「ポイベーがその周期を固定する前に[7]」は，少なくともピエール・ブランダムールの校訂を踏まえる限りでは，いずれも「月の時代」を描写している（Brind'Amour 1996）。

---

1) 紙幅の都合で原文は省略したが，1555Vに基づき拙訳を提示。節区切りはBrind'Amour 1996に倣い，1840EBを踏襲した。なお，古版本の略号は前巻掲載の拙稿（鈴木2023a）の「付表」および本稿末尾の「付表2」を参照。

2) 「第7千年紀に」« au septiesme nombre de mille » の直訳は「第7の千に」だが，これが第7千年紀を意味することは学術的には異論がない（Brind'Amour 1996，Lemesurier 2003，Sieburth 2012など）。

3) イブン・エズラの『理性の書』は1507年にヴェネツィアで刊行されており，16世紀の神秘思想家ヨハネス・トリテミウスや占星術師ルーカ・ガウリコにも影響した（Brind'Amour 1993:188）。354年4か月の周期に世界が支配されているという思想は，その周期性を利用し，過去の出来事から未来を予言できるとする考えに繋がった（セリグマン 1961:328）。

4) 表１は基本的にBrind'Amour 1993:190-191の2つの表を組み合わせたものだが，天使名は表記揺れが大きいため，『天使辞典』（グスタフ・デイヴィッドスン，吉永進一監訳，創元社，2004年）に基づく表記に直した。

5) 原文は1555Vに依拠したが，Brind'Amour 1996は原文の autre を outreに，accomplir & mineをs'accomplir, miner と校訂している。拙訳はそれらを踏まえた。

6) 原文はLatona だが，ブランダムールはLatonia（ラトナの娘＝月の女神）と校訂している。彼の校訂を「時には有害」とまで批判したアンナ・カールステットでさえも，この個所は何の注記もなしにラトニアとしている（Carlstedt 2005:58, 119-120, 161）。

7) 原文PhebésはPhébé（ポイベー＝月神の異称）と読む説とPhébus（ポイボス＝太陽神の異称）と読む説とがあるが，ブランダムールに倣い，ここでは前者と理解した。

また，詩百篇に明記された年代は，1607年（第6巻54番，第8巻71番），1609年（第10巻91番），1700年（第1巻49番），1727年[8]（第3巻77番），1999年（第10巻72番）であり[9]，日本でも有名な1999年を除けば，すべて月の時代の範囲に収まる。これらの点から，ノストラダムスの主たる関心は，自らの属する月の時代に向けられていた印象を受ける。だが，第一序文では自分の予言の範囲を3797年までとしているため，太陽の時代の終わり（西暦2242年）までを視野に入れていた可能性が指摘されている。そこで次に，この3797年について検討しよう。

2.2『予言集』初版における年代観（2）

ノストラダムスは，自身の予言の範囲について，第一序文でこう述べる。

> ［…］私はこの百篇ごとの占星術的な四行詩からなる予言の書を構成したのである。私はそれを少々曖昧な形でつなぎ合わせることを望んだが，それは現在から3797年までの永続的な予言なのである。かくも長い拡がりに眉を顰める人々もいるだろう。しかし，月下の至る所で（予言した通りの）事件が起こって認識されるであろうし，それによって全地上であまねく理解されるのだ，わが息子よ。（第33～34節）

この3797年[10]についての定説はない。ブランダムールは紀元前5204年を起点とした9000年を示すとし，ブリュノ・プテ=ジラールもそれを踏襲したが，いずれにも何故9000年なのかの説明はない（Brind'Amour 1996:24-25, Petey-Girard 2003:214）。ノストラダムスは上で引用した第一序文第46節を除けば第8千年紀に言及したこともなく，9000年への言及は，『予言集』の他の個所でも見られないため，いささか説得力を欠くのではないだろうか。

ピエール・ベアールの場合，『予言集』の国王アンリ2世に宛てた献辞（以下，便宜上「第二序文」と呼ぶ）で天地創造からイエスまでを4173年8か月としていることを踏まえ，そこから約8000年（4173 + 3797 = 7970）の期間を描こうとしたと考え，創世紀元7001年から8000年をサトゥルヌスの時代と解釈したコルネリウス・アグリッパの影響があると見た（Béhar 1996:155-158）。だが，ベアール説の場合，16世紀は第6千年紀に属することになり，第7千年紀に居るとした第一序文と整合しない。ベアール説の当否は，そもそも第一序文と第二序文の記述を直結してしまってよいのかどうかという問題点と結びつく。そこで，3797年を一時棚上げにして，第二序文の年代観を検討しよう。

2.3『予言集』第二部における年代観

『予言集』は，生前第7巻までが刊行され，死後2年目の1568年に第二序文と詩百篇第8～10巻を併せた完全版が刊行された[11]（第二序文以降を，1568年版を扱うときの慣例に倣い「第二部」と呼ぶ）。その第二序文にはこうある。

> そしてそれは深く算定された第7千年紀初頭に起こるであろう出来事にまでも遥々と及ぶのです。我が天文学的算定と他の知識が及びうる限りでは，その時にはイエス・キリストとその教会に敵対する者たちが，大変な勢いではびこり始めるでしょう。（第11～12節）

このくだりでは，第7千年紀が未来に位置付けられている。そして，第二序文第22～29節と第91～102節には，アダム誕生からイエス誕生までの年数が列挙されているが，それぞれで合計が異なっている。ブランダムールは順にA方式（système A），B方式（système B）と呼んでいるので，本稿でもそれに倣う。A方式の合計は4757ないし4758年（ブランダムールの修正では5757ないし5758年），B方式の合計はノストラダムス自身が「およそ4173年8か月」と明記している[12]。ゆえに16世紀は，A方式では第7千年紀（ブランダムールの修正では第8千年紀），B方式では第6千年紀に属する。そして，上記の第11～12節が示す第7千年紀を未来に置くことと整合するのは，B方式のみとなる。

ブランダムールは「現在すなわち1557年3月14日」（第10節）という記述とA方式，奥付の「1558年6月27日」とB方式をそれぞれ結びつけ，それぞれの執筆時期とした（Brind'Amour 1993:171）。だが，それならば第7千年紀にいるはずのA方式と，第7千年紀を未来としている第11～

---

8) 原文はLan mil sept cens vingt & sept en Octobre で，「1727年10月」のほか，「1700年10月27日」とも読める（Brind'Amour 1996:435）。

9) このほか，第6巻2番の「580年頃」「703年」は千を省略した「1580年頃」「1703年」と理解されている（Brind'Amour 1993:211）。

10) 初版，生前の増補版（1557U）など，多くの版で「3797年」となっている。ただし，18世紀前半までの版には，以下の通り異文も見られた。「3767年」: 1588Rf, 1589Rg, 1589Me, 1590SJ, 1610Me, 1611Va, 1612Me, 1653AB, 1665Ba, 1697Vi, 1720To.「1597年」: 1589PV.「3792年」: 1627Ma.「3192年」: 1627Di.「1767年」: 1691ABa, 1691ABb.「3292年」: 1698Ly.

11)『予言集』第二部が1558年に刊行されていたとする説もあるが，現時点ではこれを確実視できるだけの材料はない。関連する拙稿（鈴木2023b）も参照のこと。

12) ブランダムールはこれらをそのまま紀元前の年代としているが，西暦に0年はないため，「イエス生誕まで」が生誕のその年（西暦1年）までを含むのか，その年の直前（紀元前1年）までを想定した計算なのかで1年ずれることになる。しかし，ノストラダムスは表2の通りA方式ではモーセの年代に1年の幅を持たせている。また，B方式の合計では「およそ」（environ）と断っている通り，1年単位まで厳密に捉えることに意味のある年代ではない。そこで本稿では，煩瑣になるのを避けるため，便宜的に0を含む通常の算術的な計算を適用している。なお，歴史的にイエス生誕は紀元前4年以前に遡ることが有力視されているが，後述の『1566年向けの暦』ではイエス以後，西暦1566年までの期間が「1566年」と示されているので，イエス以後の期間に修正は不要と考えられる。

12節が同時期に書かれたことになり，不自然である。

第二序文についてミレイユ・ユションは，ノストラダムスの元秘書ジャン=エメ・ド・シャヴィニーが，時期も異なる様々な草稿を再編集したものと推測している（Huchon 2021:269-270）。この考えに基づけば，第二序文は前半と後半といった単純な分割ではなく，細切れに素材が合成された可能性も想定できる[13]。ユションはその辺りを詳述していないが，実際，以下の個所は不自然である。

> ［…］そして，諸王国が東方の人々に弱らされると，（その時代の人々からは）造物主である神が，大きなドグとドガム[14]を産み出させるために，地獄の牢からサタンを解放したのではないかと思われることでしょう。［…］（第68節）

> ［…］そしてサタンはもう一度縛られ，人々の間には世界的な平和がもたらされるでしょう。（サタンが）アゾアランたち[15]を使って蜜に胆汁と悪疫の誘惑を混ぜることを望むにもかかわらず，イエス・キリストの教会はあらゆる苦難から解放されるでしょう。それは第7千年紀に近い時のことです。［…］（第113節）

> ［…］その後，反キリストが地獄の君主となるでしょう。最後にもう一度キリスト教徒の諸王国も不信心者たちの諸王国もみな25年間にわたって震撼させられるのです。［…］地獄の君主サタンの力を借りて余りにも多くの悪事が行われるので，ほぼ全世界が衰退し荒廃するでしょう。［…］造物主である神は，人々の苦しみを聞き届けて，サタンが深い穴の地獄の深淵に置かれ縛られているようにと，お命じになります。それで神と人々の間に普遍的な平和が始まります。（サタンは）およそ千年の間縛られたままで，（その間は）教会の権力がより大きな力になっていくでしょう。それから，（サタンは縛めを）解かれた状態に戻るのです。（第119節～第123節）

これらの記述に，『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」を下敷きにした部分があることはしばしば指摘されるところだが，順序が不自然ではないだろうか。まず，第68節でサタンに言及があるが，サタンそのものかどうかも曖昧な叙述になっている。その後，第113節で再びサタンに言及されるが，そこで突然「もう一度[16]」縛られる。そして第119節以降でいつ解放されたのかの記述のないまま暴れ，またもや千年縛られ，解き放たれる。だが，第二序文で未来を語っているのは第123節までで，サタンが解き放たれたところで未来の描写が唐突に終わってしまう。少なくとも第119節以降と第113節は逆にして，サタンが縛られた後，千年後に解き放たれるが，再び縛られるという筋書きの方が自然に思われる。実際，「ヨハネの黙示録」第20章の文脈はそう理解されている（村上 2000:310-311）。こうした点を踏まえれば，第二序文は複数の草稿を基にしつつも，内容への配慮が不十分な形で合成されたことが疑われる[17]。

さて，ノストラダムスは上で引用した第11～12節にせよ第113節にせよ，第7千年紀を未来に置いていることで共通している。また，第二序文で有名な，以下の「1792年」も同様に捉えうるように思われる。

> その年が始まると，かつてアフリカで行われたよりも大きな迫害がキリスト教会に加えられ，それは時代の刷新と思われることになる年，1792年まで続くでしょう。その後，ローマの人々は立ち直り始めるでしょう。そして，大きな分裂や継続的な諸変化を伴わないわけではありませんが，彼らの原初の光のいくらかを受け取りつつ，いくつかの暗き闇を追い払い始めるでしょう。（第107～108節）

この「時代の刷新」である「1792年」がフランス革命の的中だと，信奉者たちは喧伝してきた。しかし，これは土星が10回公転する周期（300年）に基づく予言で，中世アラビアの占星術師アブー・マアシャルに由来する（Brind'Amour 1993:218-219）。西欧では中世の神学者ピエール・ダイイがまず引き継ぎ，1789年を反キリスト出現の年とした（Minois 1996:256, 323 / ミノワ 2000:298, 382）。

---

13) ユションの説には部分的に賛成できるが，シャヴィニーが編纂したという点には同意しがたい。第8～10巻の前に置かれた第二序文には「一千篇を締めくくる我が予言集の残り3巻の詩百篇」，即ち第8巻から第10巻で完結と書かれているのに対し，詩百篇は全12巻の構想だったとシャヴィニーは主張し，第11・12巻の断片を紹介したからだ（Chavigny 1594）。彼の姿勢は第二序文の記述と一致しない。

14) Dog, Dogamは，黙示録などに登場するゴグとマゴグとの類似性がしばしば指摘される。ピーター・ラメジャラーはDog, Dohamという異文を基に，うろ覚えで借用した結果と推測した（Lemesurier 2003:396）。だが，1568XにはDog, Dogamとある。それらを逆から読み，dをgに置き換えるとGog, Magogになる。これは何らかの意図による変換の可能性もあるだろう。

15) Azoarains は未詳。Azosrains, Azostains, Azestains など，16世紀末から17世紀の版に様々な異文があるが，ブランダムールはSarrasins（サラセン人）のアナグラム（換字変名）と見ている（Brind'Amour 1993:196）。

16) 1568Xをはじめ古版本はentre une foisと綴っているが，これがencore une fois（もう一度）の誤植であろうことは19世紀以来指摘されている。

17) リチャード・シーバースも，第二序文は編者不明の予言アンソロジー『ミラビリス・リベル』（1520年代）から，再臨シナリオと反キリスト像を3種ずつ持ち込んで混合したと述べている（Sieburth 2012:XXXVIII）。彼の立場も，やはり混成的な見方と言ってよいものと思われる。

16世紀の占星術師ピエール・チュレルやルーサはそれを引き継ぎ，星位に基づく算定として，1789年とそこから続く25年間の激変を重視した（Laver 1952:138-140）[18]。ノストラダムスも1792年を反キリストの年と考えていたのであれば，それはB方式で創世紀元4173+1792=5965年となり，6千年紀末となる。ルーサらが重視した「25年」と，前出の第119節以降の反キリストが荒らす25年間とが対応するのなら，4173+1792+25=5990年で，これも6千年紀末となる。それらは，7千年紀初頭に教会の敵が蔓延るという前出の第11節以降の叙述と，概ね一致すると見ることができ，「1792年」も7千年紀を未来に置いていると考えられる。

それらのシナリオに合致するのはB方式であって，A方式ではない。A方式は「エウセビオスのものと異なっています」（第28節）と断っており，エウセビオス式に紀元前5200年を基準にしていた『予言集』初版とは意識的に変えたことが窺える。だが，そうして試算してはみたものの，自身の描く未来像にうまく組み込むまでには至らなかった，放棄された試みの一つだったのではないだろうか。

以上で『予言集』初版と死後版とで，依拠している紀元が異なることは確認できた。次に，それらのいずれとも異なる，毎年の『暦』における紀元を検討してみよう。

2.4 『暦』における年代観

ノストラダムスは1550年向けのものを嚆矢として，毎年の暦ないし占候（pronostication）[19]を刊行していた。現存最古は1555年向けの占候だが，そこには紀元の言及はない。1556年版の現存は確認されておらず，次の『1557年向けの暦』では，1557年が「編年史家たちの真の算定によれば天地創造から5524年」とある。その後，1559年～1563年，1566年向けの暦にはそれぞれ5526年～5530年，5533年とあり，これらの連続性からいずれも天地創造を紀元前3967年に置いていることが分かる[20]。

それに対し，『1565年向けの暦』では6565年，『1567年向けの暦』では6567年となっており，いずれも起点が紀元前5000年となっている[21]。また，『1566年向けの暦』は前述の通り，紀元前3967年を起点にする一方，天地創造から西暦1566年までの年数を別掲し，それを計算すると，起点は紀元前4056年となる（後掲の表2を参照[22]）。

ブランダムールはそれらを踏まえて，ノストラダムスが紀元前4757（5757）年，前5000年，前4173年，前4056年，前3967年という5つの年代を示しつつも，統一的な見解を示し得なかったと結論付けた（Brind'Amour 1993:177）。ユションも，第二序文は公刊を想定していなかった草稿だったから，『暦』との齟齬も含めて決定的な判断には至っていなかったと推測している（Huchon 2021:269）。

確かに，推定年代を昇順ないし降順で機械的に並べれば，ブランダムールらの見解は肯える。だが，それぞれの推定をもう少し整理してみると，また違った様相が見えてくる。

3. 年代観に関する仮説

3.1 年代観の変遷の時期

まず，1555年の『予言集』初版で前5200年が採用されており，詩百篇でもその周期を踏襲したような表現が見られることは既に見た。3797年については，太陽の時代の終わり（西暦2242年）を実際の期限と想定しつつ，初版刊行年の「1555年」を加算することで，ダミーの期限として3797年を提示したという説が出ており，一定の説得力を持つと考えられる[23]。以上から，おそらく初版の時点では前5200年を紀元とする思想で統一されていたものと思われる。

それに対し，1556年頃に刊行された『1557年向けの暦』では「前3967年」が打ち出され，以降の暦でほぼ貫かれ

---

[18] 1789年と1792年とで異なるが，ルーサは1789年頃を挙げる一方，自身がそれを著してから243年後ともしていた。後者は1792年となる（Laver 1952:140 / レイヴァー 1999:220 ; ウィルソン 1973:272）。

[19] pronostication (s) は「占筮」「占い」等と訳されてきたが，本稿では「占候」を当てている。占候とは「日・月・星・雲気などを観察して，吉凶をうらなう」ことを指す（『新漢語林』第2版，大修館書店，2011年）。

[20] 参照した暦6点の原題は以下の通り（刊行年未記載はオリジナルの暦全てに共通するので，s.d.は省略した）。*Prognostication nouvelle, & prediction portenteuse, pour l'an M. D. LV*…, Lyon, Jean Brotot ; *Almanach pour l'An 1557*..., Paris, Jacques Kerver ; *An Almanacke for the yeare of oure Lorde God, 1559*..., s.l. ; *Almanach, pour l'an 1560*…, Paris, Guillaume Le Noir ; *Almanach pour l'an mil cinq cens soixante & un*…, Paris, Barbe Regnault ; *Almanach nouveau, pour l'an. 1562*…, Paris, Guillaume Le Noir & Jean Bonfons ; *Réimpression de l'almanach de Michel de Nostredame pour l'année 1563*, Mariebourg, sub S^{i} Michaelis invoc^{m}, 1905 ; *Pronostico et lunario de l'anno bissestile MDLXIIII*…, Firenze, Giorgio Marescotti ; *Almanach pour l'an M. D. LXV*..., Lyon, Benoist Odo ; *Almanach pour l'an M. D. LXVI*…, Lyon, Antoine Volant & Pierre Brotot ; *Réimpression de l'almanach de Michel de Nostredame pour l'année 1567*, Mariebourg, sub S^{i} Michaelis invoc^{m}, 1904 ; *Almanach per l'anno M. D. LXVII*..., Mondovì, s.n. 以上のうち1559年向けは同時代の英訳，1561年向けは偽版の方，1563年向けは翻刻版だが，年代の表記は連続している。また，1564年向けの現存は確認されていないが，同時代のイタリア語訳版には，天地創造から「1531年」とあり，これが「5531年」の誤植であれば，これも連続していることになる。

[21] 『1567年向けの暦』は実物の現存が確認されておらず，20世紀初頭に刊行された翻刻版すら，長らく所在不明だった。だが，少なくとも翻刻版は，カンザス大学図書館に所蔵されている（蔵書記号C22337）。他方，以前から同時代のイタリア語訳版によって，「6567年」となっていること自体は知られていた（Brind'Amour 1993）。

[22] 表2のうち，単位のない数は年数を示す。また，「PB修正」というのは，ブランダムールの校訂によって修正した場合の年代を指す。B方式は個別の年数の合計が，明記された合計と一致しないという問題があり，その参考のために併記した。

表 2 創世紀元についてのまとめ

	第二序文 A 方式		第二序文 B 方式		1566 年向けの暦
	1568X	PB 修正	1568X	PB 修正	
天地創造					1590
アダム誕生	1242	2242	1506	1056	
～ノア誕生					
～大洪水開始	1080	1080	600	600	
～大洪水期終了			1 年 2 か月	1	
～アブラハム誕生			295	295	326
～イサク誕生	515 か 516	515 か 516	100	100	539
～ヤコブ誕生			60	60	
～エジプト入り			130	130	
～モーセ			430	430	
～出エジプト	570	570			
～ダビデ			480	480	514
～神殿建設	1350	1350			
～バビロン捕囚			—	531	474
～第二神殿建設					613
～イエス生誕			490	490	
上記の合計	4757 か 4758	5757 か 5758	4092 年 2 か月	4173	4056
明記された合計	—		およそ 4173 年 8 か月		—

ている。晩年の『1565年向けの暦』と『1567年向けの暦』だけ「前5000年」となっているが，その2冊だけがノストラダムスの著作の中で，リヨンのブノワ・オドが刊行したものとなっている。それらにユションは偽版の疑いをかけているが，偽版でなくとも1565年向けで「前5000年」とし，1566年向けで「前3967年」に戻し，1567年向けで再び「前5000年」にするのは，あまりにも不自然である。特に『1567年向けの暦』は没後の刊行であり，遺稿を編集した旨の記載があるので，ノストラダムス自身の意向を適切に反映したものかどうかに疑問がある。

『予言集』第二序文にA方式，B方式という2つの年代が併存していることは確かに支離滅裂だが，ユションらが指摘するように草稿の継ぎはぎと考えるならば，第二序文の他の個所と整合しないA方式は，前述の通り，ノストラダムスの未来像には十分に組み込めないまま放置（あるいは放棄）された草案だったのではないかと考えられる。そしてB方式（前4173年）ならば，『1557年向けの暦』などでの「前3967年」とは200年ほどの誤差でしかなく，いずれでも16世紀は第6千年紀のことになる。これはさほど大きい修正ではなく，どちらの年を採用しても第二序文のシナリオとは矛盾しない。B方式も草案だった可能性はあるが，未来のシナリオとの整合性はある程度意識されていたものと思われる。

そうなると，『予言集』初版刊行（1555年5月）から『1557年向けの暦』の執筆時期（1556年頃）にかけて，「前5200年」から「前3967年」に切り替えた修正が，生前

[23] 公刊された文献の範囲では，ラメジャラーが最初に提示し，シーバースやユションも同様の見解を示した（Lemesurier 2003:382, Sieburth 2012:316-317, Huchon 2021:138）。他方，ノストラダムスの意図が人々を神への信仰に立ち返らせることにあったとするドニ・クルーゼは，3797年は「3」（三位一体など），「7」（創造の7日間など），「9」（イエス昇天の第9時など）という聖書で重要な意味を持つ数字を組み合わせた象徴的なもので，年としての意味を持たないとした（Crouzet 2011:302-303）。しかし，聖書には様々な数字が出てくるので「1」は唯一神，「2」は二人の証人などと，他の数字でも結び付けは可能であり，少々説得力を欠く。クルーゼがそのような立場を採ったのは，神への帰依の訴求と，終末の遅延とが両立しづらいからだろう。ただし，この点は，3797年を2242年と同一視する立場でも同様に問題となりうる。以前，別名義の拙稿（山津 2020）では，終末が間近に迫っているかのような当時の予言的言説に対し，あえて読者を安心させる意図で先送りにしたのではないかとしたが，終末の遅延の確定は，敬虔なキリスト教徒にとってはむしろ失望に繋がる面もあった筈である。ユションも2242+1555に先延ばしの意図を見出しているが，その意図の踏み込んだ説明はない。こうした点は，更なる検討が必要であろう。

確実に見られた最も大きな修正ということになる。その要因は一体何だったのだろうか。

該当する時期のノストラダムスにとって最も大きな出来事は，間違いなく国王アンリ2世夫妻との謁見（1555年8月）だったはずである。注目すべきはこの謁見のあと，かつて親交のあったジュール・セザール・スカリジェールが，ノストラダムスを痛罵するラテン語詩を書いていることである[24]。該当する3篇のうち2篇を，ブランダムールの仏訳（Brind'Amour 1993:86）を重訳する形で紹介しよう。

「ノストラダムスについて」
何故ノストラダムスは預言者を自称するのか。
彼が言うには，ベニヤミン族の末裔だからだという。
もしも預言者だったムハンマドの末裔なら，
ノストラダムスは二重の預言者ということになる。

「ノストラダムスに対して」
お人好しのフランスよ，汝は何を考え期待するのか，
ユダヤのわざを使うあの狂気が垂れ流す，
その託宣にすがろうなどとは。
古今の王国の遺産で荘厳なる，かの有名な王杖を，
あの悪党が弄ぶのを汝は許そうというのか。
あの卑しき者の言葉がどれだけ下らない戯言か，
汝には分からないのか。
汝の信頼を彼奴（あやつ）が踏みにじるのを受け入れるのか。
最も愚昧なるものは悪意ある道化師の才知なのか，
その瞞着を何度となく厚遇してしまう汝なのか。
彼奴に苦しめられたいと望んでしまうほどに
汝がお人好しならば，せめて耐えられないほどに
苦しめられてしまうがよい！

これらの詩は1574年に公刊されたが，スカリジェール自身は1558年に歿しているので，それ以前に書かれたはずである。ノストラダムスの謁見から間もない頃に書かれたのかどうかまでは断言できないが，ノストラダムスに対し，「ユダヤ人」を理由とする類似の批判や嫉妬が，宮廷やその周辺で投げかけられたのではないだろうか。

3.2 ノストラダムスの出自

スカリジェールはノストラダムスをユダヤ人としているが，この点はやや不正確である。ノストラダムス自身はキリスト教徒であり，父方はユダヤ系だったが，祖父ピエールの時点でユダヤ教からキリスト教への改宗者（以下，単に「改宗者」）となっていた（Lhez 1968 ; Leroy 1972）[25]。母方は未詳だったが，近年，母方の祖母ベアトリス・チュレリ[26]の父ジャックが改宗者であったことが明らかになっており，ベアトリスの姉妹がすべて改宗者の家と婚姻関係にあることから，ベアトリスの夫（ノストラダムスの母方の祖父ルネ・ド・サン＝レミ）の家も改宗者の家柄だったと推定される（Iancu-Agou 2016）。ただし，特に母方について近年ようやく明らかになったという事実が示すように，ノストラダムスは自身のユダヤ系の出自を吹聴しておらず，ベニヤミン族の末裔とも自称していない[27]。

さて，354年4か月の周期はユダヤ教学者イブン・エズラが提唱したものであり，ユダヤ教で用いられていた太陰暦（1年＝354日）からのアナロジーによって導かれた周期だという（Brind'Amour 1993:187-188）。王宮に招かれ，謁見をひとまず無事に乗り切ったノストラダムスは，「ユダヤ人」として差別的評価を受け続けることになれば，更なる成功の妨げになると判断し，自身の作品からユダヤ教的な色合いを極力除去する方向で，新たな未来像を構築しようと試みたのではないだろうか。

実際，この観点で『予言集』を読み直すと，いくつか目につく点がある。詩百篇集にはユダヤ人（juif）は一度も登場しない。しかし，関連する語が次の2篇に見られる[28]。

---

[24] ノストラダムスはアジャン在住のスカリジェールに招かれ，1530年代にアジャンで暮らした時期があった。その親交は喧嘩別れで終わったとされるが，ノストラダムスは『至妙の製法集』（*Exquises Receptes*, 1555年）でも，スカリジェールの多才を「雄弁の父キケロの生まれ変わりかどうかまでは分からないが，その完璧にして至高の詩について言えば第二のマロ，医学の学識はガレノス2人分」と評価し，「この世の誰に対してよりも恩義を感じる」とも述べている（Nostredame 1555:219）。なお，喧嘩別れには同時代史料の裏付けがなく，本稿で引用した詩にしても，ノストラダムス個人を貶めるためというより，学者の道を踏み外して怪しげな予言者として成り上がろうとすることを憂えたものと見る説がルネ・ラコストにより提示されている（Lacoste 2000）。本人を思いやっての批判なら「悪党」（Scelus）とまでは呼ばないのではないか等，ラコスト説には疑問もあるが，本稿の主題ではないのでここでは詳述しない。

[25] フランス王国に併合されたプロヴァンスでは，国王ルイ12世が1500年と1501年にユダヤ教徒の立ち退き令を出していた（菅野 2016:70）。そのため，ノストラダムスの誕生以前に，プロヴァンスのユダヤ教徒は，改宗か移住かの選択を強いられていた。なお，ユダヤ人の定義は一様ではないが，本稿での「ユダヤ人」は「ユダヤ教徒」と同義で，先祖にユダヤ教徒が含まれていても本人と両親がキリスト教徒の場合，「ユダヤ系」と表記している。

[26] 従来，母方の祖母の姓はトゥレル（Tourrel）とされてきたが，ブーシュ＝デュ＝ローヌ県立古文書館の調査を踏まえたというIancu-Agou 2016に従って本稿ではチュレリ（Turelli）とした。

[27] ノストラダムスがベニヤミン族の末裔を自称したという，スカリジェールの詩句の根拠は分からない。かつて彼が本人から直接聞いた可能性もあるが，そうしたユダヤ系であることを強調する話を，ノストラダムス自身が積極的にしたかどうかは疑わしい。なお，18世紀の伝記にはノストラダムスをイッサカル族の末裔とするものがあるが（Haitze 1711:4），そちらは全く根拠のない話だろう。

[28] 第6巻18番の原文は1557Uに，第8巻96番の原文は1568Xに，それぞれ依拠した。これらの詩には，特筆に値する校訂は提案されていない。なお，この2篇の他，Saturnins を「サトゥルヌス主義者」の意味に捉える場合，そこにユダヤ人が含まれているという説もある。

詩百篇第6巻18番
Par les phisiques le grand Roy delaissé,
Par sort non art. de l'Ebrieu est en vie:
Luy & son genre au regne hault poulsé,
Grace donnee à gent qui Christ enuie.
医師たちから見放された大王が，
ヘブライの技術ではなく呪術によって生き延びる。
彼とその同類が王国で高位に押し上げられ，
キリストを嫉む民族に恩寵が与えられる。

詩百篇第8巻96番
La synagogue sterile sans nul fruit
Sera receu entre les infideles
De Babylon la fille du porsuit
Misere & triste luy trenchera les aisles.
何の実も宿さない不妊のシナゴーグは，
追い立てられた者の娘バビロンの
不信心者たちの間で受け入れられるだろう。
悲惨と悲しみがその翼を切り落とすだろう。

1篇目は1557年の増補版が初出である。その「キリストを嫉む民族」は，『新約聖書』「マタイによる福音書」27章などを踏まえれば，ユダヤ人を示す表現であることが明らかで，明確にキリスト教側から描いている[29]。2篇目は死後の完全版が初出だが，ユダヤ教の会堂であるシナゴーグをかなり否定的な文脈で語っている。こうした詩篇からは，ユダヤ教と距離をとろうとしている様子が垣間見える。

また，第二序文には以下の記述がある。

> そのノアの誕生から，世界的な洪水が近づいて方舟が完成するまでに，もし年数が太陽に基づくものか，月に基づくものか，或いは両者の混合であるならば，600年が過ぎたのです。聖書は太陽の方を支持していると私は考えています。（第92節）[30]

ここでは月（純粋な太陰暦），太陽（太陽暦），両者の混合（太陰太陽暦）のうち，太陽暦を採用している。太陰暦に基づいていたはずの旧約聖書の編年を太陽暦と見なすことについて，エドガー・レオニは「深刻な誤謬」とし，ノストラダムスがユダヤ系であったこと自体を疑ったリー・マッキャンの説にも言及していた（Leoni 1961:339,689）。前述の通り，ノストラダムスがユダヤ系であることは父祖の記録から明らかであり，マッキャンの疑惑は的外れである。だが，ノストラダムスは，まさにマッキャンがしたように，ユダヤ系と無関係であるかのように誤認させるため，あえて太陽暦の採用を強調したのではないだろうか。

さらに，『1566年向けの暦』で2つの年代が併記されていることについても，「前3967年」の方は従来の暦と同じく「編年史家たちの算定」[31]に基づくとしていたのに対し，「前4056年」の方は，「ヘブライ人らの算定による世界の年代」（Les eages du monde selon la computation des Hebrieux）となっている。それ以上の説明はなく，「前4086年」を支持しているとは限らない。言い換えると，この併記も「自分が尊重している算定は，この通りユダヤ人の算定とは全く違うのだ」と暗に示しただけであるように思われる。

改宗者はユダヤ人とは分けられ，プロヴァンスでは1542年に改宗者への差別が法的に禁止された（Kober 1944:360）。だが，改宗者は時としてユダヤ人以上に，差別されることがあったという[32]。ノストラダムスの一族でユダヤ系の出自を隠そうとしたのは彼一人ではない。『古プロヴァンス詩人列伝』（1575年）を執筆した弟ジャンや，第一序文を捧げられた長男であり，『プロヴァンスの歴史と年代記』（1614年）を執筆した詩人セザールは，自らの一族の歴史を語った際に粉飾を加える一方で，ユダヤ系であったことには言及しなかった（Iancu-Agou 2016:124）。ジャンは詩も残しているが，その詩に見られる強烈なカトリック信仰は，「おそらく自らのユダヤ系の出自を忘れたいという欲求」に由来するとも言われている（Kober 1944:363）。

本稿で示した仮説が正しい場合，初版発表分は第7千年

---

[29] この詩の具体的なモデルは指摘されていないが，セザール・ド・ノートルダムの年代記に登場し，コウバーが要約的に紹介した話と似ている。それによると，プロヴァンスがフランス王領に編入される前の1452年，善良王ルネは熟練した「ヘブライ人」医師たちの医療技術を見込んで侍医にし，それが1454年の王令に繋がったという。ルネが出したその王令はプロヴァンスのユダヤ人たちに好意的なものであった（Kober 1944:364）。この話は第6巻18番に似ているが，決定的に違うのは詩の方で評価されたのは技術ではなくsort（呪術，まじない）という点である（このsortを「運命」の意味に捉えて「運よく」「死ぬ運命になかったから」等の意味合いにとる論者もいるが，医師の技術と無関係である点に変わりはない）。つまり，詩においては，ユダヤ人の地位向上が，怪しげな（あるいはユダヤ人自身の貢献でない）要素に帰せられており，ユダヤ人を貶めるかのような文脈になっている。

[30] 「年数」の原語は les dons で，1627Maなどでは les ans に書き換えられている。レオニのようにそちらを支持する論者もいるが，les donnéesの省略形と理解しても類似の意味は導けるように思われる。また，「両者の混合」の原語は dix mixtionsだが，レオニやブランダムールは deux mixtions と校訂しており，ここでの訳はそれに従った（Leoni 1961:338, Brind'Amour 1993:172）。

[31] 前3967年としていた「編年史家たち」は未詳である。創造紀元を前3967年前後としていた論者は何人もいたが，Patrides 1982:55-57と岡崎1996:12-13の各一覧表を見る限りでは，ノストラダムスが歿する以前に活動していたのは，前3966年としていたゲラルドゥス・メルカトル（Gerardus Mercator, 1512-1594）とペーター・ファン・オプメーア（Peter van Opmeer, 1526-1595）くらいしかいないようである。

[32] 17～18世紀にプロヴァンスで刊行された反ユダヤ的な文書には，その根底にユダヤ人それ自体よりも改宗者への敵意を孕むものが見られた（Kober 1944:368）。17世紀以降においてさえもそうだったのだから，改宗して日の浅い家系がまだ多かった時期に著名になったノストラダムスには，同様の敵意が向けられても不思議ではないだろう。

紀を現在とみる年代観，第二部は第7千年紀を未来とみる年代観でそれぞれ描写されていることになり，『予言集』の全体で統一的な年代が貫徹されていると見ることはできない。だが，部分ごとにならば統一性を見出せることになるので，『予言集』の初出の時期の違いや，その時の時代状況も考慮に入れて読んでいく必要が生じるだろう[33]。

4. まとめ

ノストラダムスの『予言集』や『暦』では，創世紀元に関して，互いに一致しない年数が示されている。従来は，その中に統一性や一貫性はないと捉えられていたが，発表された時期や作品を詳細に整理してみると，ある程度なら時期的な変遷を想定できる可能性が見えてくる。本稿ではその動機として，ユダヤ系の出自に対する差別を回避する意図があったという仮説を提起した。

その仮説には更なる検討が必要だろうが，この問題は，現在伝わっている『予言集』の構成をあたかも最初から出来上がっていたように捉えるのではなく，詩篇の発表された時期とノストラダムスが置かれていた立場を考慮に入れ，そうした時代状況との緊張関係の中で『予言集』が形成された過程を考察していく必要性を認識することにも繋がっていくはずである。

付表(2)

前巻掲載の拙稿（鈴木 2023a）で，今後の拙稿でも参照しうる古版本の一覧を「付表」として示した。その後，新たに所蔵先から複写を入手（ないしウェブ上での公開を確認）できた古版本の一覧を添える。その中には長らく所在不明で，先行研究でも十分に（あるいは全く）参照されて来なかった版もあるので，所蔵先の情報も併記しておく。

付表 古版本の略号と所蔵先

略号	出版地	出版業者	年
1604PR	Lyon	PAR Pierre Rigaud	s.d.
	Bibliothèque de Toulouse : Res. D XVI 528		
1610Me	[Paris]	[Pierre Ménier]	[s.d.?]
	Bibliothèques municipales d'Angers: Rés. BL 2151		
1611Va	Rouen	Pierre Valentin	s.d.
	Lippische Landesbibliothek - Theologische Bibliothek und Mediothek : 02-F 759		
1628dRb	Troyes	Pierre du Ruau	s.d.
	Bibliothèque Mazarine : 8° 53880		
1643Ga	Marseilles	Claude Garcin	1643
	Houghton Library, Harvard University : *FC5 N8425P 1643		
1695Bo	Metz	François Bouchard	1695
	Bibliothèques-Médiathèques de Metz : RES HH 100		
1731Do	Avignon	François J. Domergue	1731
	Universitäts- und Landesbibliothek Darmstadt : U 1312/198		
1772Do	Avignon	Toussaint Domergue	1772
	Bibliothèque de Genève : BGE A 7431		
1804MN	Paris	Marchands de Nouveauté	1804
	Bibliothèque municipale de Grenoble : E.22999		

文献

[1] Pierre BÉHAR, *Les Langues occultes de la Renaissance,* Paris, Éditions Desjonquères, 1996.

[2] Pierre BRIND'AMOUR, *Nostradamus Astrophile*, Ottawa, Les Presses de l'Université d'Ottawa, 1993.

[3] Pierre BRIND'AMOUR (éd.), NOSTRADAMUS, *Les Premières Centuries ou Prophéties (édition Macé Bonhomme de 1555)*, Genève, Librairie Droz S.A., 1996.

[4] Anna CARLSTEDT, *La Poésie oraculaire de Nostradamus,* Stockholm, Stockholms universitet, 2005.

[5] Jean-Aimé de CHAVIGNY, *La Premiere Face de Janus françois*, Lyon, Les Héritiers de Pierre Roussin, 1594.

[6] Denis CROUZET, *Nostradamus, une médecine des âmes à la Renaissance*, Paris, Éditions Payot & Rivages, 2011.

[7] Jean DUPÈBE, *Nostradamus - Lettres inédites*, Genève,

[33] この仮説の場合，生前の増補版（1557年）に収録された第4巻54番から第7巻42番の扱いが問題となる。本稿の仮説通り，彼がユダヤ色を薄めたいと考え，1556年頃の『暦』以降，『予言集』初版と異なる編年を採用したのだとすれば，1557年の増補版で，なぜ第一序文を差し替えずにそのまま詩を追補したのか。一つの可能性として，商業上の理由を例示しておく。ノストラダムスの私信によれば，『暦』の原稿を2種類送っても片方しか採用されず，採用された原稿に，不採用となった原稿の必要な部分を組み込むよう出版業者から要請されたことがあった（Dupèbe 1983:30-31）。つまり，彼の作品には，本人の意向よりも出版業者の意向が優先された実例が存在するのである。第一序文は明示的な編年を含んでおらず，典拠であるイブン・エズラやルーサまで遡らないとユダヤ色は分かりづらい。そこで，出版業者が何らかの意図で新版ではなく増補版を望んだことを受け入れつつ，『暦』で明示的な年代を示す時だけ，将来的な未来像の修正を見据えて，「前3967年」とすることを選んだのかもしれない。

Librairie Droz S.A., 1983.

[8] Pierre Joseph de HAITZE, *La Vie de Nostradamus*, Aix, La veuve de Charles David & Joseph David, 1711.

[9] Mireille HUCHON, *Nostradamus*, Paris, Éditions Gallimard, 2021.

[10] Danièle IANCU-AGOU, “Nostradamus’ maternal great-grandfather from Marseilles : neophyte networks and matrimonial strategies (1460-1496)”, *Jews and Christians in Medieval Europe*, Philippe Buc, Martha Keil and John Tolan (eds.), Turnhout, Brepols, 2016, p. 116-130.

[11] Adolf KOBER, “Jewish converts in Provence from the sixteenth to the eighteenth century”, *Jewish social studies,* Vol.6 (4), 1944, p. 351-374.

[12] René LACOSTE, « Jules César Scaliger et Nostradamus : amis ou ennemis ? », *Revue de l’Agenais*, Juillet-Septembre 2000, p. 227-242.

[13] James LAVER, *Nostradamus or the future foretold*, rev., Harmondsworth, Penguin Books, 1952.（ジェイムズ・レイヴァー『預言者ノストラダムス―あらかじめ語られた未来』中山茂・中山由佳訳，小学館，1999年）

[14] Peter LEMESURIER, *Nostradamus : the Illustrated Prophecies*, Alresford, John Hunt Publishing, 2003.

[15] Edgar LEONI, *Nostradamus : Life and Literature*, New York, Exposition Press, 1961.

[16] Edgar LEROY, *Nostradamus : ses origines, sa vie, son œuvre*, Bergerac, Imprimerie Trillaud, 1972.

[17] Eugène-P. LHEZ, « L’ascendance paternelle de Michel de Nostredame », *Provence historique*, t. XVIII, fasc. 74, 1968, p. 385-424.

[18] Georges MINOIS, *Histoire de l’avenir des Prophètes à la prospective*, Paris, Librairie Arthème Fayard, 1996.（ジョルジュ・ミノワ『未来の歴史―古代の預言から未来研究まで』菅野賢治・平野隆文訳，筑摩書房，2000年）

[19] Michel de NOSTREDAME, *Excellent & moult utile Opuscule à touts necessaire, qui desirent avoir cognoissance de plusieurs exquises Receptes, divisé en deux parties,* Lyon, Antoine Volant, 1555.

[20] C. A. PATRIDES, *Premises and motifs in Renaissance thought and literature*, Princeton (New Jersey), Princeton University Press, 1982.

[21] Bruno PETEY-GIRARD (éd.), NOSTRADAMUS, *Prophéties*, Paris, GF Flammarion, 2003.

[22] Richard ROUSSAT, *Livre de l’estat et mutation des temps,* Lyon, Guillaume Rouillé, 1550.

[23] Richard SIEBURTH (ed.), NOSTRADAMUS, *The Prophecies*, New York, Penguin Books, 2012.

[24] Pierre TURREL, *Le Periode, cest a dire la fin du monde,* s.l.n.d. [ca1531] (Bibliothèque Mazarine, 8° 28608)

[25] コリン・ウィルソン『オカルト・上』中村保男訳，新潮社，1973年

[26] カート・セリグマン『魔法―その歴史と正体』平田寛訳，平凡社，1961年

[27] 岡崎勝世『聖書vs.世界史 キリスト教的歴史観とは何か』講談社〈講談社現代新書〉，1996年

[28] 菅野賢治『フランス・ユダヤの歴史（上）―古代からドレフュス事件まで』慶応義塾大学出版会，2016年

[29] 鈴木大輔「ノストラダムス『予言集』初期版本に関する文献学的諸問題の検討」『放送大学文化科学研究』第2巻，2023年，p. 227-236.（鈴木 2023a）

[30] 鈴木大輔「ノストラダムス『予言集』1668年版の信頼性について ―『予言集』第二部はどの版で読むべきか―」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第32号，2023年，p. 1-13.（鈴木 2023b）

[31] 村上陽一郎「終末論の構造と預言」『ノストラダムスとルネサンス』樺山紘一・高田勇・村上陽一郎編，岩波書店，2000年，p. 309-325.

[32] 山津寿丸（鈴木大輔）「ノストラダムス　世界一の大予言者」『超能力事件クロニクル』ASIOS，彩図社，2020年，p. 184-192.